

## グループ紹介

### 趣味を生かしたボランティア

#### 〈民謡と踊りの会・扇松会〉

「子育てが終わった人たちが、これからの人生の生きがいを求めて集まってできた会で、結成十一年になります。同じ趣味を持つ人々が、仕事を忘れて夢中になれるのが健康の秘訣です。仲間が皆、自分は若いと思っっているから舞台上立つとしゃんとして、歳を感じさせない踊りをしますよ。」と、にこやかに話す会長の北條さんは、八十歳とは思えないほどの若々しい姿です。

「毎月例会があり、午前中は研修会で一人ずつ発表、午後は輪踊りや民謡を踊って親睦を深めています。ボランティア活動も盛んで、五つの班に分れて、定期的に福祉施設の訪問をしています。」

会員は四十五人で五十代から八十代まで、男性も二人、御夫妻で参加しています。今も青春という言葉がぴったりのサークルです。

連絡先 沼津市本町一五

電話 ○五五九(6)一三三八

代表者 北條 まつ



### 毛糸の暖かさで心の交流

#### 〈毛糸編み十センチ運動の会〉

月一回の活動日、メンバーの人たちは、楽しそうに手を動かしています。

公民館のそれぞれの講座を修了した主婦たちが、その後も何か地域にお返しできないかと、昭和五十三年にスタートしました。誰にでもできてお金がかからない、10cm四方の編み物(モチーフ)をつなぎ合わせて、膝掛け、ちゃんちゃんこなどを作ります。

現在のメンバーは、三十代から八十代まで十九人です。「毛糸の暖かさで心の温かさを届けたい。」作品はお年寄りに贈ったり、公民館まつりなどで即売し、全額を福祉団体に寄付します。

今では、メンバー以外の人も編んで持って来てくれたり、毛糸を寄付してくれたり、たくさんの人々の善意で支えられています。

連絡先 焼津市大富公民館

電話 ○五四(6)四三〇二

代表者 安藤 妙子



### お母さんと一緒に楽しく遊ぼう

#### 〈まめつ子文庫〉

近所に同年代の子供が少なく、我が子の遊び相手を求めていたお母さん四、五人で相談し、一緒に遊び始めたのが三年前。現在の会員数は、母子で六十二人を数えるまでになりました。幼稚園に入る前の幼児とそのお母さんが、毎週金曜日に地区のコミュニティ会館に集まって、全員で一緒に遊びます。絵本を読んだり、新聞紙や粘土で遊んだり、また、地区の老人会の方々とウォークラリーをしたりと活動の内容も様々です。週一回の活動日を、子供もお母さんも、共に楽しみにしています。

今後は、講演会の開催など母親同志の勉強会をさらに充実させていきたいと考えています。そのためにも同様の活動をしているほかの地域のグループとの交流を持ちたいと、今その情報を集めています。

連絡先 浜北市内野台四丁目九一

電話 ○五三(6)四九七〇

代表者 八木 留里子





## 日本の伝統文化に魅せられて

ロバート リイ イエリン

ROBERT LEE YELLINさん

1984年来日。1988年、山川孝子さん(沼津市)と結婚。三島市竹倉に住んで3年になる。



ロバートさん一家

### へ日本そして出会い

ロバート・リー・イエリンさんは、米国・ニュージャージー州サンディエゴ市出身です。大学で学位を得た後、まだ人生の目的がはっきりしていなかったため、YMC Aと三島のキデイ・カレッジ後援のホームステイに六週間参加するため、九年前初めて日本にきました。そのとき沼津の家族と接して、書道や陶器等に触れるうちに日本の文化に興味を持つようになり、今度は日本に住もうと決心して、再びYMC Aの紹介を得て、再来日しました。

キデイ・カレッジで教師をしていたとき、同僚だった山川孝子さんとの出会い、結婚。現在は賢太郎君(二歳)・彩文君(五ヶ月)の二人のお子さんがいます。

### ロバートさんのお話から

#### へ結婚のこと

私と彼女は、ごく自然に親近感を持ち、交際を続けるうちに結婚の意志が固まりました。しかし、二人の結婚は、文化や習慣が違いうえに、父親が兵士として敵対した過去もあり、わだかまりもありましたが、それらを克服し、両家に祝福されて、三年前に結婚しました。

### へ仕事と趣味

現在、青山学院大学厚木校と国立沼津高専で、英会話講師をしています。グローバル文化交流協会のバイリンガル環境カルタの制作にも協力しました。

今、環境問題に取り組んでいます。三島地区環境保全推進協議会の依頼で、私の目から見た「日本の自然と文化」というテーマで講演をしました。日本の伝統文化と自然が深い関係にあることを再認識してほしいと思います。

私の趣味は焼き物で、特に備前焼が気に入っています。茶碗・茶器・花器・掛軸等古いものを集めています。それらは、空気・火・水・土の四つのエネルギーが自然と一体になっているからです。日本の文化は、自然のリズムと生活を一緒にしているところが大変良いと思います。アメリカには無いものです。日本の千年以上の歴史を大切にしたいと思っています。備前焼愛好会「三陶会」で、陶器を持ち寄って語り合ったり、日本酒「道の会」で、畳に座って純米酒を味わう雰囲気は最高です。

### へ子育てと近所づきあい

二人の子供はまだ幼いので将来のことはこれからですが、長男は

近所の子供たちとよく遊びます。日本の学校では、よく勉強して知識はたくさん得られますが、自分の国のためだけでなく、もっと広い世界的な教育をしてほしいと思います。竹倉は田舎だから、子供たちは近くの学校へ通うようになると思いますが、子供の意志を尊重するつもりです。近所の人たちとは仲よくしていますよ。



### へ日本の女性と仕事

日本の女性は、子供や家族をとっても大切にしていると思います。料理が上手で、栄養のバランスを考え、食事に気を使っています。今の日本は、アメリカの十五年前くらい前と同じです。現在アメリカでは育児施設が完備しているから、女性が働きやすい環境です。会社の社長・部長、郵便屋さんなど男性と同等に仕事をしています。日本も女性のパワーで社会が変わっていくと思います。



# —ねっとわあく らいぶらりい・本との話—

「がんばれマン」

ニコル・ド・ピュロン著

竹内 迪也訳

白水社 二、〇〇〇円



アニー・ラルシエは、会社を経営する夫と二人の子供（娘と息子）を持つ専業主婦である。仕事一途で家庭や妻を顧みない夫と、母親は何でもやってくれるものとはかなり用事を言いつける子供たちとの毎日にウンザリし、私は私でありたいと宣言する。夫は、生活不安もないのに何が不満なのかと、妻の気持ちを分かってほしい。友人の世話で勤めに出るが、仕事と家事の両立は考えていたほど楽ではない。疲れ果てて元の専業主婦に戻るが、何かしなければと気持ちにはあせるばかり。そのうち、昔ジャーナリストだった腕を生かして書いた小説が女流文学賞を獲得し、生活は一変する。自分の夢は実現したかと思えたが、反対に夫との間は次第にぎくしゃくしていき、家族の絆も薄れていくようだ。

愛する家族の崩壊の危機に、自分の求めていたものはこんな生活ではなかったはずとアニーは思案にくれる…。

深刻な話のようでありながら、主人公とその家族や友達、周囲の人々との会話はウィットに富んで小気味よく、まるで軽快なテンポのコメディ映画を見ているようだ。作者がフランス人だということをお忘れ、読み手の私自身がすっかりその映画の主人公になりきってしまった。

そのように主人公と同化できるのは、何より主人公アニー・ラルシエを取り巻く環境（家族との関係や専業主婦の立場など）や、彼女が抱える悩みは、私たち日本の大多数の主婦にも共通するものであり、家族の中において妻や母親としての存在とともに、自分という一人の人間としての存在を確認したいという欲求に同感するからだろう。

それにしても、フランスという、生活習慣も文化も異なる国の主婦の悩みが日本の主婦のそれと少しも変わらないことへの驚きから、この本に新鮮な共感を覚える。また、アニーの行動力とウィットに励まされる読者も多いのではないだろうか。

(A)

## 本の紹介

「女が子どもを産みたがらない理由」

吉廣紀代子編著

十八のそれぞれの理由は、どれも真剣で胸を打つものがある。編者の解析も見事で説得力がある。現代社会の歪みが浮きぼりにされており、産みたい女性、また、男性にもすすめたい一冊。

晩成書房 一、四四二円

「自立の、夢をかたちに」

高橋ますみ著

転勤族の専業主婦が、子育てや老人介護をしながら「何かしたい」と、生徒一人から始めた家庭塾。妻・母・嫁の三役をこなしながら、一人の女性として自立した著者のパワーがひしひしと伝わってくる。

学陽書房 一、四〇〇円

「女ざかりからの出発」

桐島洋子著

固定観念にとらわれず、「恋も料理も」自由に主体的に楽しんでいる著者自身の生き方が、鮮明に記されている。時代を先取りした著者の貴重な体験は、女ざかりをどう生きるかを本音で示唆している。

角川文庫 三一〇円

「生きるかなしみ」

山田太一編

十五人の書いた作品を通して、今私たちは無力な人間の「生きるかなしみ」に目を向け、可能性を断念する勇気を持つことが必要ではないかと問いかける。読み終えて、改めて自分へのいとおしさと生きる自信がわいてくる。

筑摩書房 一、三四〇円

「少女反抗期」

尾木直樹著

思春期真っただ中の少女たちと四つに組んで生活している現役教師の著者が、精魂こめて世に問う書。今日の少女の反抗も基本的には、抑圧された女性の歴史の流れの中で、強烈な自立願望を志向しているのではないかと語っている。

学陽書房 一、四〇〇円





わたしのねっとわあく

遠く南アルプスを背景に空を朱色に染めている夕日を眺めながら、「幸せって、こういうことをいうんだなあ。」と実感しているこのごろです。

わたしの横には、愛犬「タロ」が巻き尾を風になびかせて、まるで王女様を護衛する騎士のように堂々と立っています。しかし、彼の耳がピクツと動いたらおしまい、素早く伏せの姿勢をとり、目を輝かせて待ち構えます。「ピリー」が走って来て、「クーちゃん」がやって来ると一緒になって跳ね回りながら、河川敷へ遊びに行ってしまう、当分の間戻って来ないのです。

今まで全然意識がなかった犬の飼い主の三人は、いつからともなくうちとけ合って、愛

### 錫婚式

この秋、結婚十年を迎えました。小さなころから結婚するなら年上の人という固定観念があったのですが、同級生と結婚することになりました。夫の誕生日が私より早かったので、私の誕生日の前に結婚式を挙げることにしました。

この十年を振り返ってみると、慣れない家事をしながら一年半の共働き生活は、包丁との格闘で手は傷だらけでした。そして会社を退職して初めての育児は、不安だらけで子供と一緒に泣きたくもありません。二歳違いで生まれた下の子との二人の育児も、目が回るような忙しさでした。

子供たちから少し手が離れたころ、病氣と

大のことから話し始め、家族の様子や趣味や考え方まで語り合う仲間になりました。市民劇場に入会したり、リサイクル運動に参加したりして、行動範囲が広がりました。

ネットワークという言葉が盛んに使われていますが、平素の生活の中から連携（ネットワーク）が生まれる現実には、「自由な時間が持てるとうれしいことがたくさんあるんだなあ。」と、何にもかえがたい充実した気分を満喫しながら、戻ってきた犬たちを迎えました。

たっぷり遊んで満足した「タロ」にエスコートされながら、月明かりの道をわが家に向かいました。(F・S)

## ポプリ



は縁のなかった夫が入院しました。今まで当たり前だと思っていたことができなくなり、家族が一つ屋根の下で、一緒に御飯を食べたり、テレビを見たり、そんなささいなことがどんなに幸せなことなのか、つくづく感じました。

「あつという間の十年だったね。これからもきつといういろいろなことがあるだろうね。」今年の結婚記念日の二人の会話でした。いっものは何げなく過ぎてしまうこの日も、今年十年目ということで、いろいろなことが思い出されました。何ととっても、家族が健康でこの日を迎えられたことに心から感謝したいと思います。(K・O)

### 姑が作る野菜の味

夫の実家で作る野菜は、とびきりうまい。農家だから忙しくて料理に手間をかける余裕はないから、料理方法はいたって簡単である。が、大きな鍋からどんぶりに山盛りにして出してくれるのがうれしくて、他のおかずには目もくれず、ひたすら私は食べまくる。

野菜のおいしさは鮮度であると思っている。だからいつか家庭菜園をしたいと願っていたのだが、一年ほど前からその願いがかない、次から次へといろいろな野菜作りに挑戦してきた。農薬をできるだけ使わず、とげが手に痛いきゅうりや、まだ若いうちに摘む青菜は確かにおいしかった。しかし、それでもなお、夫の実家で食べる野菜のうまさは比ではない。土地や肥料が違うのかな、農薬はどうしているのかしらなどと夫とも話をするが、そもそも土への心の込め方が違うのだろう。

ところで、私がこの野菜と出会って十四年になるが、年に二、三回ごちそうになる料理の味はいつも同じで、それがうれしい。欲をいえば、もう少し料理のレパートリーが増えるともっといいと思っていたところ、この春、甥に若くて料理の上手なお嫁さんが来て、私の希望どおりになった。私はますます実家の野菜料理が楽しみとなり、少しでもこの楽しみが長く続きますようにと、作り手である姑と義姉の健康を願う不届きな嫁である。

(H・A)



# ねっとわあく・10年

今、私たちは、「ねっとわあく」19、20号の編集、発行を終えようとしています。経験も時間も無く、あるのは情熱だけ。取材、原稿用紙との格闘、レイアウト、校正 etc. 出来映えはともかく、素敵な出会いと貴重な体験、5人の力でひとつのことを完成させた喜びで胸がいっぱいです。

こうして時を重ね、「ねっとわあく」の歴史も10年になりました。

振り返ると、特集テーマの選び方やタイトルも硬く、婦人問題が特別な問題であった10年前。今は、婦人問題そのものより生き方へと視点が移っています。高齢化社会、核家族化、女性の社会進出は、雇用慣行、結婚観、出産などに意識変革を余儀なくさせたのです。この4月より、「育児休業法」も施行されます。10年前、男性にまで育児休暇が取れるようになるとは想像できたでしょうか。先人たちの努力は着実に実を結び、女性の地位は向上、選択の幅も広がっています。

とはいえ、未解決の問題は山積しています。制度面ばかりに目がいきますが、最も大切なことは、一人ひとりの心のあり方ではないでしょうか。

私たちの話し合いの中でも、いつも立ち止まってしまったのもその点でした。「もっと男性も女性もひとりの人間として、お互いを思いやることができたら…。」

私たちは、この1年間多少なりとも婦人問題にかかわり、それが決して女性だけの問題ではないことを痛感しました。まして、いつまでも他人任せでは、「問題」でなくなる日が遠のくばかりだということも。

90年代は、人間復興の時代といわれます。性や立場の違いを越え、それぞれの立場で自分を生かしながら、男性も女性も老人も子供も誰もが、幸せに暮らせる社会を皆で目指しませんか。

「思いやり」と「希望」をエネルギーにして…。



塩崎史子 山梨真澄 小粥聖子

小野田久美子 浅野洋江

## あとがきにかえて

女性のための情報誌

「ねっとわあく」第20号

平成4年3月

編集・発行 静岡県環境・文化部 婦人課  
〒420 静岡市追手町9番6号

☎ <054> 221-3122

表紙デザイン

県浜松工業技術センター 小杉思主 世

ねっとわあく

一、平成四年度静岡県女性の海外研修団員を募集します。

二、この情報誌の「女性編集員」(五名)を募集します。任期は平成四年度一年間で、年間十五回ぐらいの編集会議と取材が主な仕事です。

● 申込み等問い合わせは、左記婦人課まで。